

# 誤読された軽騎兵進撃

『新体詩抄』から漱石へ

中原章雄

## はじめに 『新体詩抄』の評価

アルフレッド・テニソンの「軽騎隊進撃の詩」(The Charge of the Light Brigade)<sup>①</sup>は『新体詩抄』に収録されて、明治以来かなり著名な戦争詩であった。けれども、太平洋戦争後には、戦争詩であるがゆえにただちに好戦的な作品と目されて、敬遠・忌避されるようになった。戦争を直視せざるをえない今日、これまでの長い閑却のゆえに、戦争詩としてこの詩を新たに読みなおす必要がある。

「軽騎兵進撃の詩」は、その受容において最初から大きな誤解・誤読につきまといわれて来た。軍にたいする忠誠心から「玉碎」にも近い攻撃の道を突き進む軽騎兵たちの姿を吟じたこの詩が、明治初期の近代日本に紹介され、新しいスタイルの詩として訳された意義を、われわれはもつとかんがえてよいはずである。

東京大学の外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三人の教授によって編まれ、明治一五年に出版された『新体詩抄』は、日本近代詩の黎明を告げる書として、今日までその位置は不動のものであった。

しかしながら、詩集はそのような「安定」的な位置を保持してきたことによって、これまで十分な検討の対象に

ならなかったように思われる。論議の対象となる場合にも、テニソンの詩のように詩集の代表的な詩を無視あるいは軽視した結果が、詩集全体についての論議を平板なものにしてきたのであった。

『新体詩抄』に収録されている訳詩一四編のうちで、最も評価に値する詩が、トマス・グレイの「墓畔の悲歌」(An Elegy Written in a Country Churchyard)とテニソンの「軽騎隊進撃の詩」である。前者についてはここで論ずることはしないが、後者について言えば、軽騎兵の果敢な突撃を謳ったこの詩は、当時その名声が絶頂にあつたイギリスの桂冠詩人による傑作として、反響を呼び、歓迎されたにちがいない。けれども、日本人の感性にきわめて訴えやすい悲壮な突撃の詩は、それだけに、一種の過剰な理解をもつて読まれることになった。

クリミア戦争では、初めて登場した新聞社の戦争特派員によって、最前線での兵士たちのヒロイックな勇敢さと、彼らを指揮する將軍たちの戦略的戦術的な無策・無責任がコントラストをなすものとして、しばしば報道で明らかにされ、国民に衝撃を与えた。テニソンが筆を執ったバラクラヴァの戦いにおける軽騎兵の突撃は、とりわけその象徴的な例なのであった。

にもかかわらず、日本での「軽騎隊進撃の詩」の受容においては、こうした背景にはまったく無知なままに、誤解を伴ってこの詩は読まれてきたのであった。また、この誤解を『新体詩抄』全体の評価や、西欧の詩の受容にもかかわることとして考えてみたい。

## 一 戦慄 versus 既視感

「テニソン氏軽騎兵進撃の詩」には、訳者外山正一により、つぎのような解説的前文が付けられている。

此間数多の合戦此處彼處にありたる中最有名なるものは同年六月二十五日バラクラバの戦中にて英国の騎兵六百

騎が目之余る敵の大軍中へ乗り込み古今無双の手柄を顕したれども惜しいかな衆寡素より敵し難く其大概は討死にし或は擒にせられ無難に帰陣したる者甚僅にて有きと當時英国に有名なる詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟詠したる者にして何国人に限らず苟も英語を解するもの此詩を暗唱せざるなしといふ。<sup>②</sup>

この前文は、一八五四年一〇月二五日に行われた戦闘を六月と記しているように不正確なものだが、なにより問題なのは、戦闘の性格をまったく誤認していることである。すなわち、クリミヤにおけるイギリス軽騎兵の突撃が、日本古来の武士たちの典型的な奮戦とまったく同じようなイメージで理解されている。その結果、この戦況解説は、日本の伝統的な戦闘用語をちりばめた、あまりにも日本的なテクストになっている。「敵の大軍中へ乗り込」んだ六百騎は、「古今無双の手柄」を立てながらも、「衆寡」敵せず「大概は討死」したというのである。

テニソンが騎兵のヒロイックな奮戦に感銘を受けたことは明らかである。だが、この戦闘を有名にしたのは、「衆寡敵せず」討死にした軽騎兵の奮戦ではなくて、何よりも、ロシア軍の砲兵陣地に援護もなしに正面から突っ込むという無謀な突撃を彼らが強いられた異常性であった。

事態をさらに救い難いものにしたのは、この無謀きわまりない軽騎兵の突撃が、不可解な命令の誤った伝達により惹起されたことであった。しかも、この自爆的な突撃は、他に選択肢のない局面で最後の手段として敢行されたというような、やむをえないものでは決してなかった。

軽騎兵の突撃を戦場で目撃していた友軍であるフランスの將軍でさえ、「壮拳」と言いながらも、「氣違いざ」と呼び、ロシア軍の將校は、イギリス騎兵は全員酔っ払っているのだとしか考えられなかったという。テニソンはこうした反応を承知の上で作詩しているのである。<sup>③</sup>

したがって、騎兵のヒロイックな奮戦は、それがいかに感動的であったとしても、怒りと戦慄を同時に伴うもの

であった。そうである以上、彼らの突撃を日本の伝統的な美辞麗句で表現するほど事実を歪めるものはない。華麗さを売りものにする前近代的な軽騎兵の突撃が、破壊力抜群の近代的な砲兵陣地に向かって行われたという、時代錯誤がこの戦闘で暴かれた悲惨さであることを考えれば、源平の合戦か、南北朝の戦闘を描くような前文の紋切り型の修辞は、かなり罪の重い誤解ということになる。

ところが、外山は、イギリス全土を戦慄させた戦闘に異常性は感じとることなく、むしろ、一種の既視感でもって、きわめて日本的にそれを見てしまったのである。おそらく外山には、イギリスの詩人が騎兵の奮戦を讃えつつ、同じ詩のなかで軍の作戦の「大失態」を批判するなどということは理解できなかったであろう。

このように、前文を読むかぎり、突撃の報道に接した桂冠詩人テニソンが即座に筆をとって創作し、『イグザミナー』に寄稿することになった、止むに止まれぬ切羽詰まった感情はまったく理解されていないように見える。この詩を生み出した悲惨な戦闘の背景についての基本的な事実認識が欠けているのである。<sup>④</sup>

遠いクリミヤの地で、イギリス軍が予想以上の苦戦を強いられている旨の報道が相次ぐなかで、指揮系統の混乱による無謀な突撃が甚大な損傷を招いたというニュースは、イギリス全土を震撼させた。しかも、こうした前線の報道は、『タイムズ』のラッセル記者のような、この戦争で初めて登場した新聞の戦時特派員によって、ほとんどリアルタイムに電信で故国につたえられるようになったのであった。

クリミヤ戦争では、ナイティンゲールが、軍の官僚的な組織と劣悪な医療体制を改善するのにマスコミの報道に大きく助けられたことがあまりにも有名であるが、バラクラヴァの戦闘においても、前線の実態に関する報道が決定的な役割を演じたのであった。クリミヤの悲劇は、ワートルローの大勝利やトラファルガーの海戦など、栄光の快い夢を貪っていたイギリス国民に、頭から冷水を浴びせることになる。死闘ガダルカナルを描いた最近の米映画題名「シン・レッド・ライン」は、クリミヤ戦争の甚大な被害と苦戦が生んだ当時の英語であった。

「軽騎兵進撃の詩」が生まれた背景はこのようなものであった。詩としての巧拙は別として、それが戦争詩としてかなり特異な新しい時代にふさわしい詩であったことは、少なくとも認識しておかねばならない。

二 「死地に入り入る六百騎」

前文にはつきりと表れた誤った固定観念は、訳文にも当然のこととして反映している。テニソンの原詩を参照しつつ、訳詩を見てゆこう。六連の原詩にたいして、訳詩は五連から成っている。

「其の一」は、原詩の最初の二連を圧縮しているが、死の旅路へと駆られる軽騎兵の不安な出発は、かなり忠実に再現されている。

一里半なり一里半 並びて進む一里半

死地に入り入る六百騎

訳詩は、「將は掛れの命下す」と突撃の開始を告げる。ところが、ここで原詩からの重大な脱落がある。第二連五行目の“Some one had blundered.”が省略されているのである。テニソンは、無謀な突撃を惹起した責任の所在には言及も暗示もしないが、「大失態」を何者かが犯したことを、“blundered”などという、詩にも悲劇にもなじみにくい動詞をあえて挿入して、事態の異常さを十分に強調したのである。<sup>⑤</sup>

訳詩は重要な詩句を欠きながらも、原詩を踏まえて、軽騎兵たちが「大失態」の発生に多少とも気がつきながら、「譯を糾すは分ならず」と諦め、「これ命これに従ひて 死ぬるの外はあらざらん」と観念し、一丸となって「死地に入り入」れることを述べる。命令への絶対服従によって動かされる近代的な軍隊の苛酷な実態が、この突撃によ

つて最も深刻な形で浮き彫りにされたのであった。  
 つぎに訳詩は第二連で、原詩第三連に対応して、凄まじい圧倒的な砲火に包まれながら進む騎兵隊の悲惨な突撃の様を描き出す。

右を望めば大筒ぞ	前も左りも又筒ぞ
共に打出す砲聲は	天に轟くいかづちの
響の如く凄まじや	弾丸雨飛の間にも
猛り立てぞ進なる	

これらの詩句は、第四連でも若干のヴァリエーションを加えて繰り返されている。騎兵の壮烈な奮戦を述べた第三連も、最後では「残るはいとゞわづかなり」と騎兵隊が被った甚大な犠牲を述べ、この詩句もまた、第四連でリフレインをなしている。

第四連では、敵の砲兵陣地に突入した軽騎兵（へ）抜けば玉ちる刃をば 皆もろ共に振あげて（こ）が、ロシア兵、コサック兵を切り倒す奮戦ぶり（へ）敵陣近く乗り掛けて 大砲方をなで切りに（こ）も詠じられるが、「大筒」にはなすすべも無く圧倒される悲惨な様が強調されている。

ついで、原詩では「死の谷（the valley of Death）」とついでに「死のあぎと（the jaws of Death）」が二度使用されているのにたいして、訳詩では、「死地」が四度、「鱶の口」が二度繰り返されている。ともに詩全体が死のイメージで貫かれていることには変わりがない。

弾丸雨飛の其中に  
 縦横むじん切り靡く  
 死地より出で、乗り帰へす  
 鰐の口より脱れ出て  
 帰るは元の一里半  
 六百人の其中で  
 残るはいとゞわづかなり

原詩の最後連である第六連は、「彼らの栄光が何時薄れることがありえようか」と偉業の不滅を讃え、最後に「お、高貴な六百騎よ」と締めくくるが、これは訳詩では最後の第五連に相当する。

あゝ勇ましきものゝふの  
 よに香しき其譽  
 手柄は永く伝へなん

訳詩はさらに、「六百人の豪傑」の敵陣への突入が「孫ひこやしやこ」にまで伝えられ、「未代までも名は朽ちじ」と、軍神とも言つべき軽騎兵の栄光の不滅をひたすら強調している。ここでも、原詩との間に、そう大きくはないが見逃せない相違が生ずる。原詩はこの突撃を「wild charge」と呼び、批判のニュアンスを残している。テニソンは、壮拳の不滅性と軽騎兵の勇敢さを讃えながらも、彼らを悲惨な突撃に駆り立てたものを許してはいない。詩人はけつして騎兵隊の「古今無双の手柄」を手放しに絶賛しているのではないのである。

ロシア軍の砲兵陣地に一団となって突進する軽騎兵たちがどれほど勇猛果敢であろうと、彼らが不可避免的に被った甚大な損害は、戦術的には大死にと言つても良いほどの空しい犠牲であった。原詩の英語テクストには、こうした悲惨な突撃への詩人の怒りと感嘆と、そして悲しみが交錯し、重なり合つて結晶している。勇敢なる戦士たちへ

の紋切り型の賛美ほど、愚かな作戦への批判を含んだテニソンの悲痛な気持ちからほど遠い感情はなかったであろう。

おそらく、ここでテニソンの思いをさらに複雑にさせたのは、夫人の戦争への眼差しである。結婚後のテニソンにとつて、とりわけ詩作において、彼女の存在がどれほど大きかったかについては、すでに書いたことがある。テニソン夫人エミリは、日記を一人称単数ではなく、ほとんど常に一人称複数で書いていた。そこには、クリミヤの開戦時からの戦争への不安がはつきりと記されている。<sup>⑤</sup>

以上見てきたように、訳詩においては、突撃の悲劇によって暴露された武勇と失態の無残なコントラストも、それを形象化した詩人の意図も、とりたてて関心の対象とならず、イギリス軍の「豪傑」の単純な礼讃だけに絞られてしまった。<sup>⑥</sup> “Some one had blundered.” という詩句の欠落には、軍の上層部の失態などは翻訳し紹介するにふさわしくないと考えた帝国大学教授としての外山正一の判断が働いたのであるうか。けれども、前文に明らかのように、バラクラヴァの戦闘自体に関する誤認が最初から大きく作用したことは否定できないであろう。

しかしながら、結果的には「軽騎兵進撃の詩」を正しく紹介したことはならなかったにしても、『新体詩抄』が、国民国家間の近代的な戦争における苛酷な戦闘と悲惨な兵士の運命を取り上げた著名な詩を収録したことの意義は、どれほど強調しても強調し過ぎることはないであろう。

### 三 「外山らの新体詩は『詩』にあらず」

『新体詩抄』の批評史にとつて残念なことは、こうしたテニソンの誤読そのことだけでなく、誤読によって「騎兵隊進撃の詩」が、たんに武勇を讃えた好戦的な詩と受け取られたことである。その結果、明治期から戦前までは平凡な戦闘詩として読めれ、戦後はまた、その故に忌避され無視されてしまったことである。



さらにその結果、『新体詩抄』という詩集も、列強に加わって苛酷な近代戦を戦う運命をたどる日本を象徴する詩を収録した新しい詩集としての意義を評価されることがないままに今日まで経過してしまったのである。

『新体詩抄』が、粗悪で稚拙な、詩と呼び難い詩も収録していることは否定できないかもしれない。それは『海潮音』の見事な象徴詩群に比べると、一層目立つてあろう。上田敏がその「序」で「彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす」と評した作品に比べれば、あまりに散文的であろう。

森鷗外は、「外山等の新体詩は『詩』にあらず」と辛辣に評したといわれる。たしかに鷗外には西洋の詩からいくつかの優れた日本語訳を残した実績があった。けれども、鷗外といえども、翻訳の言語として漢語訳をも採用せざるをえなかったように、訳詩にふさわしい日本語を定着させるには至らなかった。鷗外の評だけを笠に着て『新体詩抄』を酷評するのはあまりに安易であらう。<sup>⑦</sup>

夏目漱石も新体詩には生涯を通して関心を寄せていたようである。それは新しい岩波版『漱石全集』の索引を見ただけでも明らかである。「新体詩」の項目には、夥しい数の言及が彼の全著作のなかでなされていることが分かる。

とりわけ日露戦争時には、彼自身が学生からも、まずい詩を書かれては困るなどと悪口をいわれながらも、戦闘的な新体詩を書いている一方で、『吾輩は猫である』のなかでは、越智東風の「新体詩」として、上田敏の『海潮音』のなかの訳詩のパロディまがいの詩を挿入したりしている。『海潮音』が鷗外に捧げられたことを考えれば、鷗外への対抗意識と、絶賛を博した同僚上田敏調の訳詩の言語に必ずしも全面的に賛意を示していなかったであろうことが見られるようである。

イギリス文学研究者としてイギリスの詩に深い理解と関心をもっていた漱石は、小説家としての創作だけに満足することなく、日本の近代詩にふさわしい言語を独自に模索しようとする意志をもっていたであろう。

「輕騎兵の進撃」や「グレー氏墳上感懷の詩」を初めとして、『新体詩抄』は、どれほど多くの、またどれほど多様な、「死」に彩られていることだろうか。「反戦詩として読まれるべき」と評されるテニソンの「船將の詩」、三人の漁夫の暴風による溺死を吟じたチャールズ・キングズリーの「悲歌」、ネルソンやブレイク提督の戦死に言及したトマス・キャンベルの「英国海軍の詩」など、死がこの詩集のライトモチーフであるかのようである。

さらには、外山と矢田部の競訳の形で掲げられている、ハムレットのあの有名な独白でさえ、全編を貫く数々の死者を視野に収めつつ読むとき、日本の読者にとって新たな意味を帯びてくるように思われる。

明治以来、性急な近代化が必然的に残した夥しい死者の葬列にたいして、彼らに相応しい挽歌を必ずしも捧げてこなかった、この国の歴史のなかで、『新体詩抄』は歴史を先取りするかのように、死のリフレインを奏でている。

最近、三〇年ぶりに復刊された『座談会明治文学史』（岩波現代ライブラリー）を読むと、全編を通じて柳田泉、勝本清一郎という、明治文学研究者の最初の世代の凄まじい博識や知見にあらためて圧倒される。しかしながら、最初にほとんど一章を費やして取り上げられている『新体詩抄』に関するかぎり、座談会は退屈なペダントリーに空回りしているとしか言いがたい。<sup>⑥</sup>

たとえば、勝本は、外山正一の「社会学の原理に題す」について、「自然科学の理論やスペンサー哲学を作詩態度のなかに受け入れようとしている」と、この詩については説明するまでもないことを指摘しつつも、それだけ『新体詩抄』の全貌を把握するにはむしろ焦点を外れた説明を行うなど、従来の定説の範囲内で饒舌を費やしている。ところが、テニソンの「輕騎兵進撃」については、論議されるどころか、まったく言及されていない。

伊藤整は太平洋戦争中に『戦争の文学』という、ユニークな近代文学のアンソロジーを編んでいて、戦争文学への関心を示していた。たとえば、そこで彼は、「人間解放の新文学の思潮は、赤い血に塗られたこれらの戦記文学を生まれたままの場所に置き去りにしたまま前進し、顧みるどころがなかった」と書いたり、「実戦に従い、敵弾を潜

った武人たちの術作と新文学とが、どういふ風に連絡してゐたかと言つことは論じられたことがない」と書いていた。しかし、戦後昭和二十七年に出た、伊藤の『日本文壇史』第一巻では、『新体詩抄』をある程度詳しく扱つて、八ムレットの独白は、矢田部と外山の訳をと共に引用し、グレイの「墓畔の詩」の冒頭を「良くできてゐる」として引いたりしているが、伊藤もまた、テニソンの「軽騎兵進撃」は無視している。

単純で凡庸な戦争詩にすら、国民国家の栄光を賛美する好戦性を表現しながらも、戦争の空しさを伝えるものがある。まして、テニソンの詩を単純に解釈するのは危険であらう。

## おわりに

戦闘における指揮系統の混乱に憤激し、英雄的な突撃を賛美するのは、結局、大英帝国の桂冠詩人として、どちらも国家への過剰な義務感に基づく感情に過ぎないではないか、という考え方もあらう。だが、テニソンには、桂冠詩人であるまえにひとりの人間として生命をなげうつて「死地に乗り入れる」軽騎兵たちにたいする痛切な思いがあつたはずである。今日、われわれはテニソンが若いときから、どれほど心の病に、また病への不安に責め苛まれていたか知つている。最近の知見に照らして「軽騎兵進撃の詩」を読む必要がある。

「譯を糾すは分ならず」と諦め、「これ命これに従ひて死ぬるの外はあらざらん」と観念するのは、いつの時代にも、どこの国にも、そう珍しくない兵卒の運命かもしれない。しかし、個人の武勇が無力となる「大失態」を告発した詩人の言葉をなんらの疑問もなく飛ばしてしまつたことは、なんと日本国の近代の、また日本近代文学史の、黎明にふさわしい読みではなからうか。漱石の新体詩への関心を含めて、『新体詩抄』はさらに検討に値するであらう。秀れた俳人、漢詩人であつた漱石は、だからこそけつして俳句、漢詩に満足してゐたのではなく、新体詩といふ表現形式に大きな希望をいだいてゐたはずなのである。

① 『新体詩抄』のテキストは、森亮注の『明治大正譯詩集』（角川書店、一九七一年）に収録されたものにより、近代文学館の『新選名著復刻全集』版を参照した。テニソンの原詩については、二種のオクスフォード版とくにAdam Roberts, Alfred Tennyson (Oxford, 2000) を参照した。

『新体詩抄』には三人がそれぞれ序を書いている。あまり評価されていないが、外山正一の「序」には、「新體と名こそ新に聞ゆれば、やはり古體の大佛の法螺」という狂歌調の諧謔が見られるなど、気負いばかりが目立つ明治の詩集の序のなかでも異色である。新しい詩の困難への正しい認識がありながら、ここでの誤りは、外国の詩を日本的に理解したことから来るものであった。

② 森亮による前掲書の『新体詩抄』への注釈は、明治生まれの英文学研究者にのみ可能な優れた読みが随所に見られ貴重な注であるが、このはなはだ不適切な前文の内容については何の訂正も行っていない。むしろ、テニソンの詩に関して、「この騎兵隊の進撃の新聞記事を読み、感激してたちまちこの詩を書き上げた」と伝えられる」と誤解につながる単純化した注を付けている。

③ J.A.S.Grenville, *Europe Reshaped 1848-1878* (Oxford, 2000), 180.

クルミアヤ戦争に関するほか、その他に Paul Kerr, *The Crimean War* (London, 2000), K.Hoppen, *The Mid-Victorian Generation* (Oxford, 1998) や Michael Howard, *War in European History* (Oxford, 1976) など参考にした。

④ テニソンの評伝・伝記としては、ハラム・テニソンによる二巻の伝記のほかには、Michael Thorn, *Tennyson* (London, 1992), Robert Martin, *Tennyson: The Unquiet Heart* (London, 1980) にあつた。

⑤ 一八五五年の詩集に収録されたときには、この詩句が削除されたが、のちにテニソンは最初の発表通りにそれを復活させたという事実が、指揮系統の「大失態」であるかどうかわからず、進撃自体の無謀さへの批判が行間に滲み出ていることを示すものである。『明治大正譯詩集』の注では、この句の詩全体とのかかわりは無視して、この句を「飛ばした」結果、「不必要と思われる一般論めいた句」「譯を糾すは分ならず」などを指す）が歌い込まれている」とだけ説明している。

⑥ 「桂冠詩人の妻エミリー・テニソンの日記を読む 車椅子・戦争・ナンセンス」、『立命館言語文化研究』第二巻第二号)

⑦ 吉田精一「明治大正譯詩集解説」(前掲『明治大正譯詩集』一九ページ)。

- ⑧ 『座談会明治文学史』（岩波書店、二〇〇二年）。比較的新しい文学史である、長谷川泉・前田愛編『日本文学新史 近代』（至文堂 一九九〇年）では、『新体詩抄』自体がまったく論じられていない。
- ⑨ 伊藤整『日本文壇史1』（講談社文芸文庫、一九九四年）一八四 七ページ。この詩集には、越智治雄の卓抜な一論文があるが、個々の詩の検討には立ち入っていない。

（本学文学部特任教授）